

ヨエル書とラオデキアのセブンスデー・アドベンチスト教会 - 第二十四

Jeff Pippenger

2026-01-06

第二十四番

前回の記事は、旧約聖書の最初の書である創世記第11章から第22章、新約聖書の最初の書であるマタイの福音書、そして新約聖書にして聖書全体の最後の書である黙示録に示される、三つの並行する預言的証言に触れて締めくくった。創世記ではアブラムとの契約が示され、マタイの福音書ではキリスト教会との契約が示されており、そこではペテロが現代の霊的イスラエルの始まりと終わりの象徴となっている。両方の箇所中央の節は神の印を示しており、アブラムの場合は「割礼」、ペテロの場合はその名の変更であった。黙示録における中心の節は17章12節である。

あなたが見た十本の角は十人の王で、彼らはまだ王国を受けてはいないが、獣とともにひととき、王としての権威を受ける。ヨハネの黙示録 17:12

創世記とマタイは、神性と人間性の婚姻を示し、黙示録は日曜法における獣と竜の婚姻を示す。三つとも、ある者たちが獣の刻印を現し、他の者たちが神の印を現す日曜法を指し示している。12節に見られる獣と竜の偽りは、創世記11章のニムロデの塔に対するオメガの言及である。そこで偽りの契約宗教は裁きを受け、黙示録17章では大淫婦、すなわち大いなるバビロンが裁かれる。ニムロデはバチカンのオメガに対するアルファであり、このゆえに教皇制は大いなるバビロン、すなわちニムロデのバベルというアルファに対するオメガである。

これら三つの中央の節で注目すべきは、各行の中ほどの箇所に含まれている証言が、実際には三つの節であるということである。

これは、わたしとあなた、そしてあなたの後の子孫との間で、あなたがたが守るべきわたしの契約である。あなたがたのうちの男子は皆、割礼を受けなければならない。あなたがたは包皮の肉に割礼を施さなければならない。それが、わたしとあなたがたとの間の契約のしるしとなる。あなたがたのうち、生まれて八日目の男子は皆、代々にわたって割礼を受けなければならない。家で生まれた者も、あなたの子孫ではない異国の者で金で買い取られた者も、皆割礼を受けなければならない。創世記 17:10-12。

するとイエスは彼に答えて言われた。「バルヨナのシモンよ、あなたは幸いです。あなたにそれを明らかにしたのは肉と血ではなく、天におられるわたしの父です。さらにあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。黄泉の門もこれに打ち勝つことはできません。わたしはあなたに天の御国の鍵を授けます。あなたが地上で結ぶものは何でも、天においても結ばれます。あなたが地上で解くものは何でも、天においても解かれます。」マタイによる福音書 16:17-19

かつてあり、今はないあの獣は、第八の者であり、七人のうちの一人でもあり、滅びに至る。あなたが見た十本の角は十人の王で、まだ国を受けていないが、獣とともに

ひととき王としての権威を受ける。彼らは心を一つにして、自分たちの権力と勢力を獣に与える。ヨハネの黙示録 17:11-13.

ニムロデのれんがとモルタルによって表される偽りの契約と、塔と都市によって表される彼の教会と国家の偽の体制の物語は、ニムロデの物語のオメガにおいて表される獣の像の偽の体制を象徴している。三本の線、三つの節にある三つの中心点、これらは皆、いのちの契約と死の契約を証言している。

十四万四千は七に属する真の八番目であり、教皇制は単なる偽物である。ニムロデの一派は彼らの結婚において心を一つにしているが、それは、キリストの思いに一致させられている十四万四千に対する偽物である。「あり、いまはない」という偽の獣は、「かつてあり、今もあり、やがて来る」キリストの偽物である。

八節には、教皇制によって表される偽物の完全な表現が示されている。

あなたが見た獣は、かつてはいて、今はいない。やがて底なしの淵から上って来て、滅びに至る。地に住む者たちのうち、世の始めからその名がいのちの書に記されていない者たちは、かつてはいて、今はいないが、それでもなおいるその獣を見たとき、驚嘆する。黙示録 17:8

イエスは、かつておられ、今もおられ、やがて来られる方であり、七つに属する第八である教皇制は、「かつては在り、今はなく、しかしなお在る」獣である。「竜と獣の婚姻」が象徴する「一時間」は日曜法から始まる歴史であり、その期間に、ペテロとアブラムによって表される十万人が、教皇制が台頭するまさにその時に、旗印として天に昇る。

私たちは、ペンテコステにおいてペテロが自らのペンテコステのメッセージをヨエル書の成就として位置づけたという観点から、ヨエル書を扱おうとしてきた。十二章から成る三つの契約の系列において、各系列の中央の三節は同一の歴史を扱っており、その歴史の中でペテロはイエスと共にいる者として、カイサリア・ピリピ、すなわちパニウムにいと表されている。そこは、世界がいままさに経験しようとしている場所でもある。パニウムにおいて、ペテロはまた、ペンテコステの注ぎの際にエルサレムにもいる。十二章から成る三つの契約の系列は、パニウムとペンテコステで収束し、その時に神の封印がキリストの花嫁に押され、獣の刻印がサタンの花嫁に押される。ヨエル書は、十人の乙女のたとえにおける目覚めの呼びかけ、すなわちラオデキアのセブンスデー・アドベンチスト教会が自分たちが失われているという事実に目覚める時を示している。

ヨエル書は、四つの世代という文脈の中に位置づけられている。

ペトエルの子ヨエルに臨んだ主の言葉。

これを聞け、老人たちよ。地に住むすべての者よ、耳を傾けよ。

こんなことがあなたがたの時代に、いや、あなたがたの父祖の時代にさえ、あっただろうか。これをあなたがたの子どもたちに語れ。子どもたちがその子どもたちに語り、その子どもたちがさらに次の世代に語るようにせよ。葉食い虫が残したものをいなごが食べ、いなごが残したものを尺取虫が食べ、尺取虫が残したものを毛虫が食べた。ヨエル書 1:1-4

「老人たち」とは、十四万四千人への封印の時期におけるラオデキヤのセブンスデー・アドベンチスト教会の指導者たちのことであり、その封印は聖霊の注ぎ出しの間に行われる。「老人たち」は、エゼキエルによって「古老たち」として表されている。

すると、彼は私に言った。「人の子よ、イスラエルの家の長老たちが暗闇の中で、各々が自分の偶像の間で行っていることを、あなたは見たか。彼らは『主は私たちを見ておられない。主はこの地を見捨てた』と言っているのだ。」エゼキエル書 8章12節

靈感の示すところによれば、エゼキエル書9章の封印は、黙示録7章の封印と同一であることは明らかである。また、8章における四段階にエスカレートする忌むべき事柄に関わる「長老たち」が、25という数で表されていることも明白である。神の群れの守護者であるはずだった二十五人の「長老たち」は、太陽にひれ伏している者たちであり、彼らが最初に裁きを受ける。彼らが背を向ける聖所という文脈において、彼らは十二人ずつの二つの祭司の班と大祭司を表している。日曜令の時に、彼らは太陽にひれ伏し、獣の刻印を受け入れ、竜と獣と偽預言者に同意を誓う。二十五人は、コラ、ダタン、アビラムの反逆における二百五十人によって予表されていた。コラ、ダタン、アビラムは、香をささげる二百五十人が加わる三者連合を表している。背教の首謀者であるこの三人は、大地が口を開けて彼らを呑み込んだときに死んだ。

モーセは言った。「これによって、主が私を遣わして、これらすべての事を行わせたことをあなたがたは知るであろう。私は自分の思いでこれをしたのではない。もしこれらの者が人の常の死を遂げ、またすべての人に臨むような災いに遭うだけなら、主は私を遣わされたのではない。しかし、もし主が新しいことをなされ、地がその口を開いて彼らと彼らに属するすべてのものを呑み込み、彼らが生きたままよみに下るなら、そのときあなたがたは、これらの者が主を怒らせたのだと悟るであろう。」

彼がこれらすべての言葉を語り終えるやいなや、彼らの足もとの地面が裂けた。地は口を開け、彼らとその家々、コラに属するすべての人々と彼らの持ち物のすべてを飲み込んだ。彼らと彼らに属するものはすべて、生きたまま穴へと落ちていき、地は彼らの上に閉じた。そして彼らは会衆の中から滅び去った。

彼らの周囲にいたイスラエル人は皆、その叫び声を聞いて逃げ出した。彼らは「地が私たちまでも飲み込むのではないか」と言ったからである。主のもとから火が出て、香をささげていた二百五十人を焼き尽くした。民数記 16:28-35

1888年の反逆は、コラ、ダハン、アビラム、そして香をささげた250人の反逆によって象徴されていた。250人は、アメリカ合衆国という地の獣が口を開き竜のように語る時、すなわち日曜法に至る三重の連合と同盟を結んでいた。その時、後の雨は限りなく注がれ、ちょうど香をささげた250人が天から降る火によって滅ぼされたのと同様である。250人は、日曜法における後の雨の注ぎの間に滅ぼされる偽りの宗教制度を表している。コラとその一味に対して地が口を開いた出来事は、合衆国が口を開いて竜のように語ることを示す黙示録十一章の地震に当たる。250人に天から火が降った時、それはカルメル山でエリヤの火が下り、あの偽預言者たちが殺された時の火を象徴していた。カルメル山におけるエリヤの火は日曜法と一致するので、250人に下った火は、日曜法における後の雨の火である。

コラの反逆を扱う民数記の箇所は、ヨシュアとカレブによって示された約束の地のメッセージに対する反逆と、預言的に一致している。その反逆は、聖書における「怒りを引き起こした日」を表している。コラの反逆を記した箇所には、「あなたがたは、これらの人々が主を怒らせたのだということを知るであろう」とある。

悟るのは賢い者であり、賢い者は、コラの反逆の歴史が、約束の地に関するヨシュアのメッセージに対する反逆に重ね合わせられるべきであると悟らなければならない。その反逆はカデシュで起こり、カデシュとコラの反逆はともに、日曜法の時におけるセブンスデー・アドベンチズムの反逆に当たる。香をささげたコラと250人の者たちは、エゼキエル8章で太陽を拝む25人を予表していた。エゼキエル8章の長老たちは、神の教会の象徴であるエルサレムで行われる、次第に深刻化する四つの忌むべき行いの第四のものを表している。

最初の忌むべきことは嫉妬を引き起こす像、二番目は隠された部屋、三番目はタンムズのために嘆き泣くことで、その後、二十五人の男たちが太陽にひれ伏す。続く第九章では、第八章に示された忌むべきことのためにため息をつき、泣いている者たちが誰であるかが明らかにされる。嘆き、泣く者たちは、東から上ってくる天使によって印を押される。天使は使者であり、メッセージを表す。

東からの封印のメッセージは、東風のメッセージであり、すなわちイスラムのメッセージである。十四万四千人が封印されると、滅びの天使たちがその働きを始める。それは、預言の外的な筋が「国家的背教の後には国家的破滅が続く」と教える、まさにその地点である。コラによって象徴される者たちに対して裁きが遂行される前に、反逆者たちはエルサレムの外へ連れ出される。エルサレムから取り除かれるのは悪しき者たちであり、エルサレムから逃げるのは義人ではない。

さらに霊が私を引き上げ、東向きの主の宮の東の門へ連れて行った。すると、門の入口に二十五人の者がいた。その中に、民のつかさであるアズルの子ヤアザニヤと、ベナヤの子ペラテヤを見た。

そのとき彼は私に言った。「人の子よ、これらの者こそ、この町で災いを企て、悪しき助言を与える者たちである。彼らはこう言う。『時は近くない。家を建てよう。この町は釜で、われらは肉だ。』」

それゆえ、彼らに向かって預言せよ、預言せよ、人の子よ。主の霊が私の上に臨み、私に言われた、「語れ。主はこう仰せられる。」

イスラエルの家よ、あなたがたはこう言った。わたしはあなたがたの心に上る思いを、一つ残らず知っているからだ。あなたがたはこの町で自分の打ち殺した者を増やし、その通りを殺された者で満ちた。ゆえに、主なる神はこう言われる。あなたがたがそのただ中に横たえたあなたがたの殺された者は肉であり、この町は釜である。しかし、わたしはあなたがたをそのただ中から引き出す。あなたがたは剣を恐れた。主なる神は言われる、わたしは剣をあなたがたの上に臨ませる。わたしはあなたがたをそのただ中から引き出し、異邦人の手に渡し、あなたがたの間に裁きを行う。あなたがたは剣に倒れる。わたしはイスラエルの境であなたがたを裁く。そのとき、あなたがたは、わたしが主であることを知る。この町はあなたがたの釜とはならず、あなたがたも

そのただ中の肉とはならない。むしろ、わたしはイスラエルの境であなたがたを裁く。そして、あなたがたは、わたしが主であることを知る。というのは、あなたがたはわたしの掟に歩まず、わたしの裁きを行わず、かえって、あなたがたの周囲にいる異邦の民の習わしに従って行ったからである。

私が預言していたとき、ベナヤの子ペラテヤが死んだ。そこで私は顔を地に伏せてひれ伏し、大声で叫んで言った。「ああ、主なる神よ！あなたはイスラエルの残りの者をことごとく滅ぼされるのですか。」エゼキエル 11:1-13.

エルサレムは、麦が毒麦から分けられるとき、すなわち日曜法の時に清められる。25で象徴される人々、あるいはコラの250人は、外へ、エルサレムの「境界」へ連れ出され、そこで死ぬ。25は一週間のあいだ奉仕した祭司の数であり、その十倍の数である250で象徴される時、それは世界的な教会を表す。というのも、10は世界規模を象徴する数だからである。戦う教会は麦と毒麦から成る教会として定義され、勝利の教会は麦のみから成る教会を表す。

神には生きている教会がないのか。神には教会がある。だがそれは凱旋の教会ではなく、戦う教会である。私たちは、不完全な教会員がいること、小麦の中に毒麦が交じっていることを残念に思う。イエスは言われた。「天の御国は、自分の畑に良い種を蒔いた人にたとえられる。ところが、人々が眠っているうちに、その人の敵が来て、小麦の間に毒麦を蒔いて立ち去った。……そこで家の主人のしもべたちが来て言った、『ご主人さま、畑には良い種をお蒔きになったではありませんか。では、どうして毒麦があるのですか』。主人は彼らに言った、『敵がしたのだ』。しもべたちは言った、『それでは、行ってそれを抜き集めましょうか』。しかし主人は言った、『いや、毒麦を集めるうちに小麦まで一緒に抜き取ってしまうかもしれないからだ。収穫まで両方とも一緒に育つままにしておきなさい。収穫の時には、私は刈り手たちにこう言おう。まず毒麦を集め、束にして焼くために縛れ。だが小麦は私の倉に集めよ。』」

小麦と毒麦のたとえにおいて、毒麦を抜き取ってはならないとされた理由がわかる。小麦まで毒麦とともに根こそぎにされるのを避けるためである。人間の見解や判断は重大な誤りを犯しかねない。しかし、誤って小麦の一株でも引き抜いてしまうことのないように、主は「収穫まで両方とも共に成長させておきなさい」と言われる。そのとき天使たちは、滅びに定められた毒麦をより分けて集めるのである。進んだ真理を信じると称する私たちの教会にも、小麦の間の毒麦のように、欠けや誤りのある人々がいる。それでも神は寛容で忍耐深い。神は誤っている者を戒め、警告されるが、神が教えようとしておられる教訓を学ぶのに長い時間を要する者たちを滅ぼされはしない。小麦から毒麦を根こそぎにしてしまうこともなさらない。毒麦と小麦は収穫まで共に生え続ける。小麦が十分に成長して成熟すると、その熟した性質ゆえに、毒麦とははっきり区別されるようになる。

地上のキリストの教会は不完全である。しかし、神はその不完全さのゆえにご自分の教会を滅ぼされることはない。これまでも、そしてこれからも、知識に伴わない熱心に満ち、教会を清め、小麦のただ中から毒麦を抜き取ってしまう者たちがいるだろう。しかし、キリストは、誤っている者や、教会の中にありながら回心していない者への対処の仕方について、特別な光を与えておられる。教会員が、品性に欠陥があると考える者を排除しようとして、衝動的で、過度に熱心で、性急な行動をとつ

てはならない。小麦の間には毒麦が現れる。しかし、神の定められた方法によらない限り、毒麦を抜き取ることは、放置しておくよりも害をもたらす。主が真に回心した者たちを教会に加えられる一方で、サタンも同時に、回心していない者たちをその交わりの中に引き入れる。キリストが良い種をまいておられる間に、サタンは毒麦をまいている。教会員には、相反する二つの影響が絶えず及んでいる。一方の影響は教会の純化のために働き、もう一方は神の民を墮落させるために働く。牧師たちへの証言
45、46。

悪しき者たちは滅ぼされるためにエルサレムの外へ連れ出される。彼らを取り除かれるのは収穫の時であり、それはまた小麦が熟する時でもある。というのも、その時に小麦は、五旬祭の二つの揺り動かすパンとしてささげられる初穂として集められるからである。小麦の初穂の刈り入れは、聖書の預言における固有の主題である。麦と毒麦の選り分けはまさにこの主題を扱っており、キリストの多くのたとえ話が、このきわめて重要な預言的な道標を指し示している。

また、これらのたとえは、審判の後には猶予期間がないことを教えている。福音の働きが完結すると、直ちに善と悪が分けられ、両者の運命は永遠に定められる。『キリストの実物教訓』、123。

小麦のささげ物は十四万四千であり、第三の天使が小麦と毒麦を分ける。

そのとき私は第三の天使を見た。私に同行している天使が言った。「彼の言葉は恐ろしく、その使命は畏るべきものだ。彼は、毒麦の中から麦を選り分け、天の倉のためにその麦に印をし、あるいは束ねるべき天使である。」これらの事柄には、心のすべて、注意のすべてを注ぐべきである。さらに私は、私たちが今や最後のあわれみのメッセージを受けていると信じる者は、日々新たな誤りを受け入れ、あるいは吸収している者たちから分離している必要があることを、再び示された。若い者も年老いた者も、誤りと暗闇の中にある者たちの集会に出席すべきではないのを見た。天使は言った。「益のない事柄に思いをとどめるのをやめよ。」『マニユスクリプト・リリース』第5巻、425頁。

第三の天使は麦に印を押し、また麦を毒麦から選り分ける。第三の天使は日曜法を表しており、そこではラオデキアのセブンスデー・アドベンチスト教会の指導部を代表する25人の男たちがエルサレムの外へ連れ出され、裁かれる。その時点で、戦う教会は凱旋の教会へと変えられる。

この働きはまもなく終わりを迎える。戦う教会に属し、忠実であることが証明された人々は、やがて凱旋の教会となる。私たちの過去の歩みをふり返し、現在の立場に至るまでの前進の一步一步をたどってみると、私は「神を賛美します！」と言えます。神がなしてこられたみわざを見ると、私は驚嘆に満たされ、導き手であるキリストへの確信に満たされます。主が私たちを導いてこられた道と、私たちの過去の歴史における主の教えを忘れてしまうのでない限り、将来を恐れる理由は何もありません。『総会公報』1893年1月29日。

麦と毒麦の分離という預言的主题は、聖書の預言における主要な主题である。キリストが神殿を清められた出来事はこの働きの例証であり、その頂点は日曜法のときに頂点に達

する。なぜなら、裁きを受けるべき者たちが死ぬためにエルサレムの境まで連れて行かれるのを私たちは目にするからである。

イエスが公の宣教を始められたとき、神殿を冒瀆による汚れから清められた。宣教の働きの最後の行為の一つは、神殿の二度目の清めであった。同様に、世に警告を与える最後の働きにおいて、教会に対して二つの明確な呼びかけがなされる。第二の天使のメッセージはこうである。「倒れた、倒れた、大いなる都バビロンは、彼女はその姦淫の怒りのぶどう酒を諸国の民に飲ませたからである」（ヨハネの黙示録14章8節）。そして第三の天使のメッセージの大いなる叫びの中で、天からこう言う声が聞こえる。「わたしの民よ、彼女から出て来なさい。彼女の罪にあずからず、その災いを受けないために。彼女の罪は天にまで達し、神は彼女の不義を覚えておられるからである」（黙示録18章4、5節）。『セレクトッド・メッセージズ』第2巻、118頁。

麦と毒麦からなる教会は、日曜法の危機に至るまで存在し続ける。毒麦は人間の力によってではなく、第三天使によって取り除かれる。第三天使は日曜法を表すと同時に、後の雨のメッセージであり、やがて大いなる叫びへと高まる。毒麦は麦と同様に、預言的な証しの一要素である。神の摂理は日曜法にまで及び、第三天使は二度目の神殿の清めを行う。神殿は1844年10月22日に清められ、第二の神殿の清めは日曜法である。

日曜法へと導く歴史の外的要素は、毒麦と小麦、そして二つの階級を束ねることと同様に、凱旋する教会の証しの主要な要素である。黙示録の終結のメッセージは三天使の使命であり、それらは二つの階級を分離し、束ねる。しかし、ホワイト夫人が、これらの「終結のメッセージ」が「収穫を熟させる」と述べていることを理解することが重要である。収穫を熟させる終結のメッセージとは後の雨であり、それはまた、250人を「滅びの火のための柴束として」束ねる火でもある。

「ヨハネには、教会の経験における深遠で心を揺さぶる関心事の諸光景が開示された。彼は、神の民の立場、危険、闘争、そして最終的な救いを見た。彼は、地の収穫を熟させる終末の諸メッセージを記している。それは、天の倉に納められる束としてであるか、あるいは滅びの火にくべられる柴束としてであるかのいずれかである。きわめて重大な主題が彼に啓示されたが、それはとりわけ最後の教会のためであり、誤りから真理へ立ち返る者たちが、自分たちの前にある危険と闘争について教えられるためであった。地上に臨もうとしている事柄について、だれも暗黒の中にいる必要はない。」『各時代の争闘』341ページ。

彼による神殿の清めは、また、バプテスマのヨハネが自分の後に来られる方として紹介した「塵払いの男」の働きによっても示されている。彼こそが、ミラーの夢でごみを掃き出す者である。

「主は、義人と悪人の違いを明らかにしようとしておられる。なぜなら、『その手に箕を持っておられ、ご自分の打ち場を徹底して清め、ご自分の麦を倉に納められるが、もみ殻は消すことのできない火で焼き尽くされる』からである。」Review and Herald, 1892年11月8日。

ホワイト夫人は、1849年に主がご自分の民の残りの者を集めるために二度目に御手を伸ばされたと述べる際、イザヤ書を引用しており、イザヤ書とホワイト夫人は十四万四千

人の最終的な集めを指し示している。集めの過程には、第一の失望として表された散らしと再びの集めが含まれており、それが「遅延の時」の終わりにおける集めへとつながる。十四万四千人の封印に関わるこれらの各要素は、聖書預言における固有の主題である。主が罪を終結させるための道具として用いられる外的な歴史はダニエル書11章11節に表されており、最終的な集めはイザヤ書11章11節に、遅延の時の終わりは黙示録11章11節に、そして日曜法における麦と毒麦の分離はエゼキエル書11章11節に位置づけられている。

この町はあなたがたの鍋とはならず、あなたがたはその中の肉ともならない。しかし、わたしはイスラエルの境でああなたがたを裁く。エゼキエル書 11:11

ヨエル書においては、「新しいぶどう酒」は、聖所を守るべき長老たちから断たれている。「真夜中の叫び」のメッセージはヨエル書の「新しいぶどう酒」であり、日曜法の時に下ってくる火は、ペンテコステの火によって型示されている。その火はメッセージを表しており、それは「新しいぶどう酒」であるが、同時に香を献げた二百五十人を滅ぼすメッセージでもある。ラオデキア状態にあるセブンスデー・アドベンチスト教会は日曜法の時に終わりを迎える。なぜなら、その時、火が限りなく注がれて香を献げた二百五十人を滅ぼし、結果として彼らの礼拝制度を破壊するからである。

もしセブンスデー・アドベンチスト教会が日曜法の時に忠実であるなら、米国政府の権力と威力がそれを閉鎖に追い込むだろう。不忠実であるなら、単に名称をファーストデー・アドベンチスト教会か、何かよく似たものに変えるだけだ。義であろうと不義であろうと、セブンスデー・アドベンチスト教会は日曜法を越えることはない。預言的証言は、アドベンチズムが9/11に「古き道」のメッセージを拒絶したことを示しており、その「古き道」は日曜法における「閉じた戸」へと至る。その25人は、エゼキエルの箇所では「アズルの子ヤアザニヤと、ペナヤの子ペラテヤ、民の君たち」によって表されていた。

彼らの名は神の民の特質を言い表しているが、それは名ばかりである。ヤアザニヤは「神は聞く」という意味で、彼は「助け、守る」を意味するアズルの子である。ホワイト夫人は、この25人は「アズル」が象徴するように守護者であるべきだったと言っている。その子は神の声を「聞く」と公言するが、彼は見えても見えず、聞いていても聞こえない者たちの部類に属する。ペラティヤは「神によって救い出された」を意味し、その父ペナヤは「神が建てた」を意味する。エゼキエルが警告のメッセージを終えると、ペラティヤは死んだ。

この町はあなたがたの釜ではなく、あなたがたはその中の肉でもない。だが、わたしはイスラエルの国境でああなたがたをさばく。そうして、あなたがたはわたしが主であることを知る。あなたがたはわたしの掟に歩まず、わたしのさばきを行わず、むしろあなたがたの周囲の異邦の民の習わしに従ってきたからだ。私が預言していたとき、ペナヤの子ペラテヤが死んだ。そこで私は顔を地につけてひれ伏し、大声で叫んで言った。「ああ、神である主よ、あなたはイスラエルの残りの者をことごとく滅ぼされるのですか。」エゼキエル書 11:11-13

ペラテヤはエゼキエルの大声の叫びのときに死んだ。麦は、黙示録11章の成就として、2020年7月18日に通りで死んだ。麦とはモーセとエリヤである。神の御言葉の最初の著者はモーセであり、やがて来るエリヤの約束は旧約聖書の最後の言葉である。アルファとオメガ

はソドムとエジプトの通りで殺されるが、黙示録11章11節に表されているように、2024年に復活する。彼らが死んでいる間、ソドムとエジプトは喜んだ。エゼキエルは「ああ、主なる神よ、あなたはイスラエルの残りの者をことごとく終わらせられるのですか」と言うとき、ペラテヤの死を残りの者の時に位置づけている。イザヤによれば、ソドムは残りの者の時代におけるセブンスデー・アドベンチスト教会である。

天よ、聞け、地よ、耳を傾けよ。主が語られたからだ。「私は子らを養い育て、大きくしたが、彼らは私に背いた。牛はその飼い主を知り、ろばはその主人の飼い槽を知っている。しかしイスラエルは知らず、わが民は悟らない。」

ああ、罪深い国よ、不義を背負った民、悪を行う者の子孫、墮落した子ら。彼らは主を捨て、イスラエルの聖なる方を怒らせ、後ずさりして離れ去った。なぜ、これ以上打たれねばならないのか。あなたがたはますます背きを重ねるばかりだ。頭全体が病み、心全体が弱り果てている。足の裏から頭の先に至るまで、健やかなところはなく、ただ傷と打ち傷と、うみただれる傷ばかりだ。それらは閉じられもせず、包帯もされず、油で和らげられもしない。あなたがたの国は荒れ果て、あなたがたの町々は火で焼かれ、あなたがたの目の前であなたがたの土地は異国の者に食い尽くされ、異国の者に覆されたかのように荒れ果てている。そしてシオンの娘は、ぶどう畑の仮小屋のように、きゅうり畑の番小屋のように、包囲された町のように取り残されている。

もし万軍の主が、私たちにごくわずかな残りの者を残しておられなかったなら、私たちはソドムのようになり、ゴモラのようになっていたらろう。ソドムの支配者たちよ、主の言葉を聞け。ゴモラの民よ、私たちの神の律法に耳を傾けよ。イザヤ 1:2-10。

モーセとエリヤは、残りの者の時代に、ソドムとエジプトにおいて殺される。エジプトは腐敗した国家統治の象徴であり、ソドムは腐敗した教権の象徴である。ベナヤの子ペラテヤは日曜法の時に死ぬが、イザヤはそれを聖書の「怒らせた日」と同一視しており、その「日」は1863年か、あるいは日曜法のいずれかである。ベナヤの子ペラテヤは、真に神の言葉を聞く者を装った偽者を表している。残りの者の時代には、モーセとエリヤに代表される者たちが殺され、その後によみがえらされる。その復活は2023年7月、荒野で叫ぶ声によって始まった。2024年から、麦と毒麦の最終的な選別が進行している。

日曜法が制定される時、セブンスデー・アドベンチスト教会は自分たちが失われていることを知るだろう。

この都はあなたがたの大釜とはならず、あなたがたもその中の肉とはならない。むしろ、わたしはイスラエルの境でああなたがたを裁く。こうして、わたしが主であることをあなたがたは知る。あなたがたはわたしのおきてに歩まず、わたしの裁きを行わず、むしろ周囲の異邦の民のならわしに従って行ったからである。わたしが預言していたとき、ベナヤの子ペラテヤが死んだ。エゼキエル書 11:11-13

『神によって救い出された』という意味の名を持つペラティヤの死は、文脈では『死に渡される』ことを意味し、それはダニエル書11章41節で十一時の労働者が北の王の手から解放されるのと同じ時点で起こる。

ペラティヤは日曜法の時に北の王の手に引き渡される。

ベナヤの子ペラティヤ。ベナヤは『神が建てられたもの』という意味である。神が再び神

殿を建て、日曜法の時に勝利する教会として掲げようとされるまさにその時に、ペラティヤによって表される者たちは死に渡される。彼らは古い廃墟を建て直す働きに加わるのではなく、自分たちのためにトビヤの墓を築いていたからである。ペラティヤは、イザヤが『頭から足の先まで』と表す、罪に完全に覆われた体を表している。その体とは、段階的な反逆の四世代の終局にあるラオデキヤのセブンスデー・アドベンチスト教会であり、イザヤが『なおも背きに背く』と言って反逆の激化を表現しているとおりである。2024年に始まった最後の試練の過程において、小麦は三日半のあいだ死に、その後よみがえり、その時、彼らは主こそ神であることを知る。

それゆえ、預言して彼らに言え。「神である主はこう言われる。見よ、わが民よ、わたしはあなたがたの墓を開き、あなたがたを墓から引き上げ、イスラエルの地へ連れて行く。わが民よ、わたしがあなたがたの墓を開き、あなたがたを墓から引き上げるとき、あなたがたは、わたしが主であることを知る。わたしはわが霊をあなたがたのうちに置く。そうすればあなたがたは生きる。わたしはあなたがたをあなたがた自身の地に住まわせる。そのとき、主であるわたしがこれを語り、これを成し遂げたことを、あなたがたは知る」と主は言われる。エゼキエル書 37:12-14

日曜法の時に25によって表される偽りの祭司職は、そのとき主こそ神であることを知る。小麦は2024年に主こそ神であることを知り、毒麦は手遅れとなる日曜法の時にその事実目覚める。その期間は、死と復活で始まり、死で終わり、復活はない。初めに小麦は、主が黙示録11章の復活を成就されるときに神を知り、毒麦は同じ章の日曜法の地震のときに知る。その二つの道標の間で、後の雨の試練の過程が、収穫に備えて両者を成熟させる。

ヨエルのメッセージはぶどう園の歌である。しかし、それが最初に提起する問題は、人は以前の日々によって終わりの時代を見分けられるのかどうかということだ。ヨエル書に出てくる『老人たち』にはそれができなかった。というのは、真夜中に目覚めの呼び声が響くとき、彼らは断ち切られ、主の口から吐き出されるからであり、それは地の獣が口を開いて語るまさにその場所であって、バラムのろばが語り、さらに洗礼者ヨハネの父が語った場所でもある。

「古い昔の人々」への裁きは、これはあなたがたの父祖の日に起こったことかどうかという問いに基づいている。この箇所はまず「これを聞け」と言って始まり、その後、二人の証人を示す。一方は人の四世代、もう一方は四種の昆虫である。やがて彼らは真夜中の叫びで目を覚ますが、自分たちが神に選ばれた契約の民としては見過ごされてしまったのだと知るばかりである。彼らが見過ごされるのはぶどう酒がなかったからではなく、間違ったぶどう酒を持っていたからである。十人の乙女のたとえでは、ヨエルの新しいぶどう酒は油である。

彼らの救いは、後の雨のメッセージという「新しいぶどう酒」を受け入れるかどうかにかかっている。「年老いた者たち」や「古くからの人々」もまた、イザヤによって「エフライムの酔いどれ」として描かれている。そして、黙示録7章の印を受けた者たちの中にエフライムは含まれていない。彼は兄弟のマナセに置き換えられている。マナセよりも邪悪な王を見つけるのは難しいが、彼はエフライムの酔いどれに取って代わる。

自分自身の霊的な退歩を痛まず、また他者の罪を悼みもしない者たちは、神の印を持たないままにされる。主はその使者、すなわち手に殺戮の武器を持つ者たちに命じられる。「彼の後を追って町の中を行き、打て。容赦するな、憐れむな。老いも若きも、処女も幼子も女も、ことごとく殺せ。ただし、印のある者には近づくな。わたしの聖所から始めよ。」そこで彼らは、家の前にいた長老たちから始めた。

ここでわかるのは、教会—すなわち主の聖所—が、神の怒りの一撃を真っ先に受けたということである。神が大いなる光を与え、民の霊的な益の守護者として立っていた長老たちは、その委ねられた務めに背いた。彼らは、昔日のように奇跡や神の力の顕著な現れを求める必要はないという立場を取った。時代は変わったのだ、と。こうした言葉が彼らの不信を強め、彼らは言う。「主は善も行わず、また悪もしない。主はあまりにも憐れみ深く、その民を裁きで訪れることはなさないのだ。」このようにして、「平安と安全だ」という叫びが、もはやラッパのように声を上げて神の民にその背き、ヤコブの家にその罪を示すことのない者たちの口から上がる。吠えようとしなないこの口のきけない犬どもこそ、侮られた神の正しい復讐を身に受ける者たちである。男も乙女も幼子も、皆ともに滅びる。

忠実な者たちが嘆き叫んでいた忌むべき事柄は、限られた人間の目に見分けうるものにすぎなかった。しかし、はるかに悪しき罪——純粹にして聖なる神の妬みを引き起こしたそれら——は明らかにされていなかった。心を探られる大いなるお方は、不義をなす者たちがひそかに犯したすべての罪を知っておられる。これらの者は、自らの欺瞞のうちに安住するようになり、主が長く忍耐しておられるゆえに、主は見ておられないと言い、そのうえ主が地を見捨てられたかのように振る舞う。しかし主は彼らの偽善を見抜き、彼らが細心の注意を払って隠していたその罪を、人々の前に明るみに出される。

身分や威厳、世俗の知恵のいかなる優越も、また聖なる職分の地位も、人が自らの欺きに満ちた心に任されるとき、原則を投げ打つのを防ぐことはできない。尊く正しいと見なされてきた者たちが、背教の首謀者であり、無関心や神のあわれみの濫用における典型であることが明らかになる。神は、彼らの邪悪な歩みをもはや容認せず、御怒りをもって容赦なく彼らに臨まれる。

主は、大いなる光にあずかり、他者に仕えるうえで御言葉の力を体験してきた者たちから御臨在を引かれることを、好んでなさない。彼らはかつて主の忠実なしもべであり、御臨在と導きにあずかっていたが、主から離れて他の人々を誤りに導いたため、神の御不興の下に置かれるのである。Testimonies, volume 5, 211, 212.

ヨエルが「長老たち」を名指しにすると、彼はラオデキヤのセブンスデー・アドベンチスト教会の指導部に語っている。しかしヨエルは、学のある者と対比される人々をイザヤが「無学の者」と呼ぶように、その無学の者にも語りかけている。ヨエルはまた、エゼキエル書八章で太陽にひれ伏す古老たち、そして九章で最初に裁かれる者たちに語っている。さらに彼は、「これを聞け、長老たちよ。地のすべての住民よ、耳を傾けよ」と言うとき、ラオデキヤのセブンスデー・アドベンチスト教会の平信徒にも呼びかけている。

第八章の二十五人は日曜令の時期に位置づけられており、彼らは聖所に背を向けて太陽にひれ伏している。彼らは、コラ、ダタン、アビラムに与した二百五十人の反逆の「十分

の一」である。二十五人は、靈感によれば1888年に繰り返された反逆の象徴であり、それは9/11において、日曜令に至るまで、ラオデキヤのセブンスデー・アドベンチスト教会の指導部の反逆を予表していた。彼らは、イザヤ書六章で賢い者が内に実体を持つ「十分の一」として示されているのとまさに同じ時期における、反逆の「十分の一」を表している。

ヨエル書は、アドベンチズムに対し、彼らの恵みの時はすでに閉じられたと宣告する。というのも、彼らは与えられた猶予の時を罪で満ちし、その満ちた状態は頭から足の先に至るまでの病として表されており、それは後の雨のメッセージが彼らの口から絶たれていることを示しているからである。イザヤ書も第二十九章で同じ現実を描いている。

立ち止まって、驚け。叫べ、なお叫べ。彼らは酔っているが、ぶどう酒によるのではない。彼らはよろめくが、強い酒によるのではない。主はあなたがたの上に深い眠りの霊を注ぎ、あなたがたの目を閉ざし、預言者やあなたがたの支配者、先見者たちを覆った。そして、すべての幻は、あなたがたには封印された書の言葉のようになっている。人々がそれを学のある者に渡して、「どうかこれを読んでください」と言うと、彼は言う、「読めません。封印されているからです。」また、その書を学のない者に渡して、「どうかこれを読んでください」と言うと、彼は言う、「私は学がありません。」

それゆえ、主は言われた。「この民は口ではわたしに近づき、唇でわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。また、彼らのわたしへの恐れは、人間の戒めによって教え込まれたものだ。だから見よ、わたしはこの民の中で驚くべき業、すなわち驚くべき業と不思議を行う。彼らの知者の知恵は滅び、賢い者の悟りは隠されるからである。主からその計りごとを深く隠そうとし、その行いを暗やみにして、『だれがわれらを見ているのか。だれがわれらを知っているのか』と言う者たちに災いあれ。まことに、あなたがたの物事を逆さまにすることは、陶器師の粘土のように見なされるだろう。造られた物が、それを造った者について『彼はわたしを造らなかった』と言うだろうか。形作られた物が、それを形作った者について『彼には悟りがなかった』と言うだろうか。」イザヤ書 29:9-16。

賢者たちの「理解」は、神の預言の御言葉の封印が解かれることに基づいている。アドベンチズムの墮落した諸制度で訓練を受けた者たちは預言の書を読み解くことができず、神には理解がないと非難する。預言の封印が解かれても、彼らにはそれが理解できないので、理解がないのは神のほうだと非難し、そうして物事を転倒させる。アドベンチズムの博識な者も無学な者も、恩恵期間が閉じられる直前に封印が解かれる預言を理解することができない。ヨエル書は「老人たち」に聞けと命じているが、彼らは聞いても聞かず、見ても見ない。

彼らの反逆の核心は、キリストを初めであり終わりである方として認めることができないことにこそ表れている。これは、「このようなことがあなたがたの時代に、あるいはあなたがたの父祖の時代にさえ、あったらどうか」と問われているその章の文脈である。

あなたの父祖の歴史の中に、人々が「真夜中の叫び」によって目を覚ましたものの、自分たちが愚かな乙女であることに気づいた時があったらどうか。「老人たち」は「目を覚めよ」と命じられている。1844年、エクセターのキャンプ集会におけるミラー派も同様で

あった。十人の乙女のたとえは、アドベンチストの民の経験に関するたとえであり、ミラ一派の歴史において文字どおり成就し、また終わりの日々にも文字どおり再び成就するであろう。ラオデキヤ的なセブンスデー・アドベンチズムが、自らの教会の基礎となる歴史が終わりの日々にも繰り返されることを認識できないことは、預言的メッセージを解き明かす鍵である預言の原則をいっそう浮き彫りにしている。それは聖書的規則であるばかりか、猶予期間が閉じられる直前に封印が解かれるイエス・キリストのご品性の啓示の核心でもある。

ヨエルは問う。「これはあなたがたの時代に、あるいはあなたがたの父祖の時代に起こったことか」と。あるいはこう問うこともできる。「あなたがたの父祖の時代に、新しい契約の民を古い契約の民からふり分けの試みがあったか」と。あった。そして、その分離は、たとえの中で油として表されている預言的なメッセージによって成し遂げられた。「これはあなたがたの時代、あるいはあなたがたの父祖の時代に起こったことか」という言葉はただちに、父祖の時代に起こったことが、四世代にわたる破壊の激化ののちにもたらされた覚醒であったことを明らかにしている。すなわち、メッセージを四世代にわたって伝えよとの命令と、破壊の激化を象徴する四種の虫によって示されているとおりである。ヨエル書は、真夜中の叫びにおいて、退転し背教した教会に対する裁きの宣告である。聖史において、セブンスデー・アドベンチスト教会以上に大いなる光に抗してきた教会はない。その種の真理に対する反逆の象徴は「カペナウム」によって表されている。

続きは次回の記事でお届けします。

カペナウムでは、イエスは各地を歩き来る旅の合間に滞在され、そこは「ご自分の町」として知られるようになった。そこはガリラヤ湖の岸辺にあり、ゲネサレの美しい平原の境に近く、実際にその平原の上に位置していたのかもしれない。The Desire of Ages, 252.

神の子と称する者たちの中で、どれほど忍耐が乏しく示されてきたことか。どれほど多くの辛辣な言葉が語られ、私たちの信仰に属さない者たちに対してどれほど多くの非難が寄せられてきたことか。多くの者は、主がそのようにご覧になっておられないのに、他の教会に属する人々を大きな罪人と見なしてきた。他の教会の信徒をこのように見る者たちは、神の力強い御手の下にへりくだる必要がある。彼らが断罪する人々は、わずかな光しか与えられず、機会も特権も少なかったのかもしれない。もし彼らが、私たちの教会の多くの会員が受けてきた光を持っていたなら、はるかに速い歩みで前進し、その信仰を世により良く示していたかもしれない。自分の光を誇りながら、その光に歩もうとしない者たちについて、キリストはこう言われる。「しかし、あなたがたに言う。さばきの日には、ツロとシドンのほうが、あなたがたよりもなお受ける罰は軽いであろう。そして、カペナウム [大いなる光を受けてきたセブンスデー・アドベンチスト] よ、あなたは [特権の点で] 天にまで高められたが、地獄にまで引き下ろされるであろう。というのは、あなたの中で行われた力ある業がソドムで行われていたなら、あの町は今日まで残っていたであろうからである。しかし、あなたがたに言う。さばきの日には、あなたよりもソドムの地のほうがなお受ける罰は軽いであろう。」そのとき、イエスは答えて言われた。「天と地の主である父よ、感謝します。あなたはこれらの事を、[自分たちの目には] 賢く思慮深いとする者たちから隠し、幼子たちに現してくださったからです。」

今、主はこう言われる。あなたがたがこれらすべての行いをし、わたしが朝早くからあなたがたに語りかけてもあなたがたは聞かず、わたしが呼んでも答えなかったので、わたしは、あなたがたが信頼している、わたしの名によって呼ばれているこの家と、わたしがあなたがたとあなたがたの先祖に与えたこの所に対して、シロにしたと同じようにしよう。わたしは、あなたがたのすべての同胞、すなわちエフライムの全子孫を退けたように、あなたがたをわたしの前から退ける。

主は私たちの間に非常に重要な機関を設けられたが、それらはこの世の機関が運営されるのと同じようにはなく、神の秩序に従って運営されなければならない。滅びゆく魂があらゆる手段によって救われるよう、ただ神の栄光だけを見据えてそれらを運営しなければならない。神の民には御霊の証しが与えられてきたが、それでもなお多くの者が、戒めや警告、勧告に心を留めていない。

「今これを聞け、愚かな民よ、悟りのない者たちよ。目があっても見ず、耳があっても聞かない者たちよ。あなたがたはわたしを恐れないのか、と主は言われる。海の境として砂を設け、永遠の定めによってそれを越えられないようにしたわたしの前で、おののかないのか。たといその波が荒れ狂っても、打ち勝つことはできず、どよめき叫んでも、それを越えることはできないではないか。しかしこの民の心は背信し、反逆である。彼らは背いて去ってしまった。彼らは心の中で言わない。「今こそ、時にかなって前の雨も後の雨も与え、刈り入れのために定められた週をわたしたちに保ってください。主なるわたしたちの神を恐れよう」と。あなたがたの不義がこれらのものを退け、あなたがたの罪が良いものをあなたがたから差し止めた。……彼らは訴えを裁かない、みなしごの訴えを。にもかかわらず彼らは栄える。貧しい者の権利を彼らは裁かない。これらのことのために、わたしが罰しないでいられようか、と主は言われる。このような国に対して、わたしの魂が復讐を果たさないでいられようか。」

主はこう言わざるをえないのだろうか。「この民のために祈ってはならない。彼らのために叫びも祈りもささげてはならない。わたしに執り成しをしてはならない。わたしはあなたの願いを聞かないからだ」。「それゆえ、にわか雨はとどめられ、後の雨はなかった。……今からでも、わたしに向かって『わが父よ、あなたはわたしの若き日の導き手です』と叫ばないのか」 レビュー・アンド・ヘラルド、1893年8月1日。